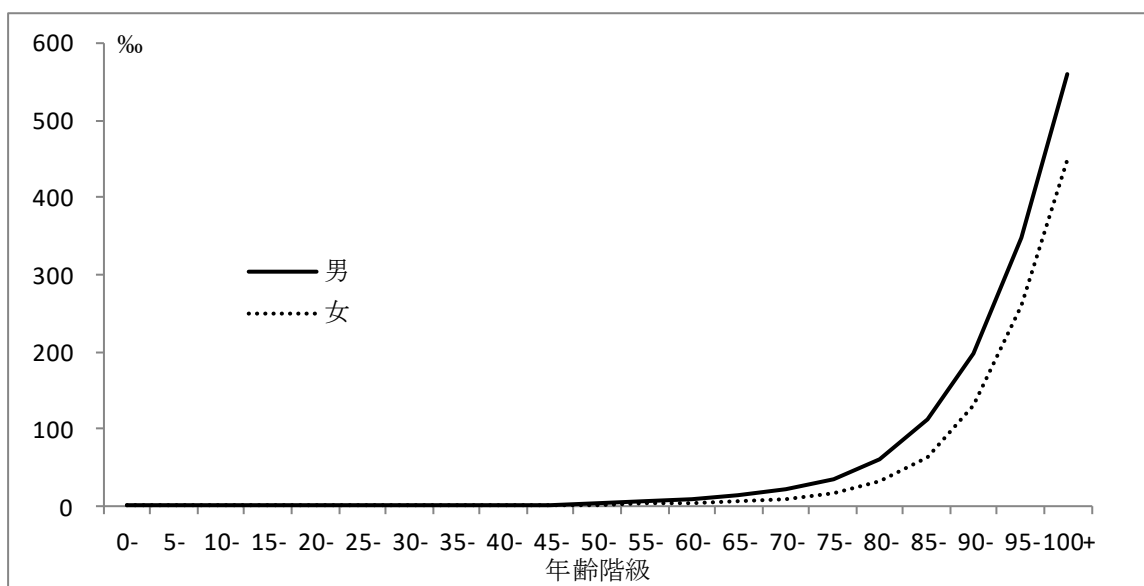


一時は「人生 100 年時代」という表現が枕詞として頻繁に使われていた。しかし、現実には多くの人が 100 歳まで生きられるわけではない。「人生 100 年時代」は心地よい響きではあるが、普通の人々が 100 歳まで生きられるという幻想を振りまくもので、その下で商品の販売促進につなげようとする行為は極めて不適切である。

図 1 は 2022 年の死亡率を性・年齢階級別に示したものである（人口 1,000 人当たり）。死亡率は男女とも 75 歳以上で年齢階級の上昇とともに急激に上昇している。実際、2022 年の死亡数 156.9 万人の 78% は 75 歳以上であった。また、死亡数がピークとなる年齢は男 86 歳、女 91 歳であった。



出所: 2022年人口動態統計年報(確定数)

図1 性・年齢階級別死亡率: 2022年

2023 年 9 月における 100 歳以上の人数は男 10,550 人、女 81,589 人と発表されている。この数は男性総数 6,049 万人の 0.02%、女性総数 6,386 万人の 0.13% に過ぎない。それでは 2020 年生まれの人はどうであろうか。2020 年の完全生命表によると、2020 年に生まれた人の中で 100 歳に到達する人の割合は男 2.1%、女 8.2% と、ごく少数の健康エリートのみが 100 歳以上まで生きられる状況である (表 1)。

表1 性別にみた平均寿命・100歳に到達する割合・平均死亡年齢の推移

年	男				女			
	平均寿命(年)	100歳に到達する割合(%)	平均死亡年齢(年)		平均寿命(年)	100歳に到達する割合(%)	平均死亡年齢(年)	
			65歳	90歳			65歳	90歳
2020	81.6	2.1	85.0	94.5	87.7	8.2	89.9	95.9
2050	84.5	4.4	87.0	95.2	90.5	15.2	92.1	96.9
2070	85.9	6.5	88.1	95.7	91.9	20.5	93.4	97.6

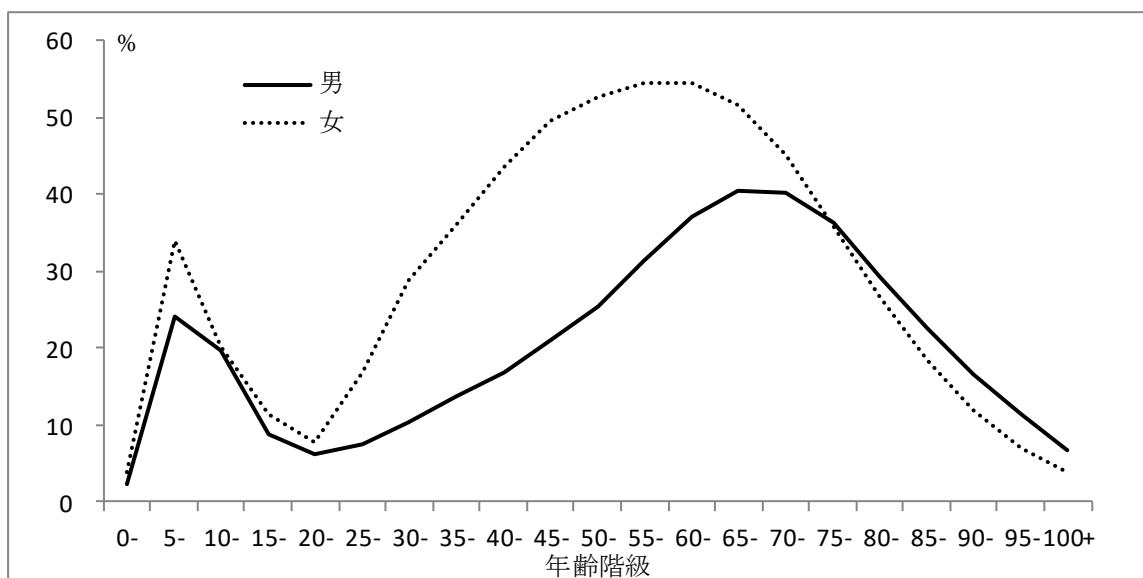
注: 「平均死亡年齢」は年齢にその年齢の平均余命を足したものである。

出所: 2020年完全生命表及び「日本の将来推計人口(令和5年推計)」。

将来に目を向けると、2050年の生命表ではこの割合は男4.4%、女15.2%、2070年生命表では男6.5%、女20.5%と増えてゆくので希望は膨らむが、2070年でも普通の人が100歳まで生きられる状況には程遠い。

90歳まで生きた人の平均死亡年齢をみると、男女差は少なく、2020年から2070年の50年間で男は1歳強、女は2歳弱しか上昇しないと見込まれている(表1)。2070年の平均寿命でも男女平均で89歳であることに鑑みて、せいぜい「人生90年時代」と謳うのが妥当なところであろうか。

図1でみたように、死亡者の多くは75歳以上であるが、病気等により75歳未満で亡くなる人も少なくない。2022年の死亡数を死因別にみると1/4(男28%、女21%)が悪性新生物(がん)で亡くなっている。75歳未満の死亡に限れば、がんによる死亡の割合は男36%、女48%とさらに高まる。図2は性・年齢階級別にがんによる死亡の割合を示したものである。男では65~74歳、女では40~74歳でがんによる死亡が死亡総数の4割を超えている。人の寿命には限界があるが、病気による死亡は必ずしも避けられないものではない。多くの人が平均寿命までは生きられることが、個人にとっても社会にとっても望ましい。



出所:2022年人口動態統計年報(確定数)

図2性・年齢階級別 がんによる死亡の割合:2022年

「人生100年時代」というフレーズは希望に満ちていて大変好ましいものであるが、どう考えても誇張であり、幻想を振りまくものである。世界の主要国の中で最も平均寿命が長い日本でも「人生90年時代」が実態に即したものであろう。そして、長くなった寿命をどう生きるかがますます重要になってくる。平均寿命には考慮されていない生存の質が重要であり、日常生活に多少の支障があっても、人や社会サービスの助けを借りて、自宅でできるだけ長く自立した生活を送ることが重要である(府川、2020)。何歳まで生きるかという長さだけを問うのは著しく不十分で、何歳までどのように生きるかという生存の長さや質が一人ひとりの国民に問われている。

参考文献

厚生労働省(2023)2022年人口動態統計年報(確定数)。

社会保障・人口問題研究所(2023)日本の将来推計人口(令和5年推計)。

府川哲夫(2020)日本の高齢化問題の実相、日本評論社。